
書 評 ・ 紹 介

Landis MacKellar, Tatiana Ermolieva, David Holacher and Leslie Myhew

The Economic Impacts of Population Ageing in Japan

Cheltenham, UK, Edward Elgar Publishing, 2004, x+231pp.

(ESRI Studies Series on Ageing)

世界が注目する日本の社会現象は人口高齢化であろう。わが国の高齢化はそのスピードと質とで最も先駆的な国となる。世界の注目はこの変化にわが国の経済・社会システムが維持・継続できるかということである。これまでは他の先進国の経験を手本として政策を立ててきたが、処方箋のないこの事態に対してどのように対処するのか、本書はそのための有効な資料の一つである。

2000年に日本政府は経済の難局を乗り切るために、21世紀に向けた再生を図る政策のための研究プロジェクト、いわゆる『ミレニアムプロジェクト』を開始した。その一環として内閣府経済総合研究所も『21世紀の経済社会システム研究プロジェクト』と題して『人口減少・高齢化の下での経済社会構造』および『循環型経済社会構造』の2つのプロジェクトを立ち上げた。本書はそのプロジェクトからの研究成果である。本書はIIASA (International Institute for Applied Systems Analysis) の Landis MacKellar が中心となり、日本の人口高齢化をIIASAで開発された多地域重複世代モデルを用い、人口構造の変化が経済に与える影響を分析した研究である。わが国の高齢化もしくは他の国における高齢化に興味を持つ研究者、政策担当者には非常に有用な文献となろう。

本書の内容は人口構造変化の経済へのインパクト、そしてそれが将来に及ぶ不確実性についてである。内容の構成は4章からなり、第1章は経済学的な人口高齢化へのアプローチのレビュー、第2章は日本における人口構造変化、第3章は日本における経済-人口シミュレーションモデル、第4章は代替的シナリオに基づくシミュレーション結果という構成になっている。

内容の中心となるのが「経済-人口のシミュレーションモデル」である。このモデルは日本だけでなく、他の地域(アメリカ、他の先進国、その他)も含めた多地域モデルとなっている。また、このモデルには介護保険や遺産などをモデルに組み込んでいるほか、将来における人口と経済に対する他のシナリオも推計している。人口に関しては低出生率と低死亡率のシナリオ、経済に関しては将来の不確実性に対し、生産性や年齢別労働参加率を確率変数にして推計を行なっている。

モデルは精緻に組み立てられているが、評者としては消費などの年齢別プロフィールが将来推計において固定されていることに対してはあまり賛成できない。遺産のモデル化により高齢者の資産が所得配分に大きな役割を示す形になっているが、期待遺産額や出生率の低下により個人の消費パターンが変化するとも言われており、人口構造のインパクトが経済にさら大きな影響を及ぼす可能性もある。

さて、推計結果はモデリングの仮定や変数の定義に左右されることはこの種の研究では避けられないが、幾つかの興味深い結果を提示している。本書によると将来的にはわが国は経済成長が鈍化するが、高齢者と若い世代の可処分所得はプラスの成長率での維持が見込まれている。これは年金などの世代間移転による所得の安定が背景にあるからである。このモデルでは納税者負担の増加を前提としているために非常に楽観的な結果であるが、実際には社会システム維持のため納税者に対して社会的コンセンサスを得ることは容易ではないであろう。また、わが国の社会保障システムは今後50年間は出生率の影響はほとんどなく、現在生存している人たちの死亡率の改善が大きな影響を示すことが示されている。短期的な面からは出生促進政策へのウェイトの軽減や社会保障システム自体を見直す必要性が想定される。さらに重要なのは人口における出生・死亡の影響より、現存する人たちの生産性の影響の方が大きいことである。生産性の維持・向上の背景には労働力不足という側面もあり、資本の整備や労働参加を助長させる政策が必要である。このように本書の分析結果は様々な政策的な介入の余地について非常に多くの示唆を与えるものである。

(松倉力也/日本大学)